

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (20)



～ 自律への言葉かけ「どうしたいの？」～

石垣市教育委員会 学校教育課長 前三盛 敦

学校では、こんなシーンがよくあります。「〇〇さん、下に落ちてるゴミを拾ってくれる？」とお願いしたら、その子がわざわざ側に寄って来て、「先生このゴミどうしますか」と尋ねてきたりします。そうすると、先生は、「どうしたらいい？」と本人に考えさせます。この子は、少し考えてゴミ箱へ捨てに行きます。また、授業で使う文房具等忘れた子が「先生〇〇を忘れました」と言ってきます。やはり、先生は、「どうしたらいい？」と本人に考えさせます。その子は少し考えて「先生貸して下さい」と言い直します。

このような子どもの指示待ちや言葉足らずの場面は、ご家庭でもありませんか。指示待ちとは、「言われないとやらない、言われたことしかできない」という状態になりますが、大まかに次のような傾向があります。①困ったことがあると「どうしたい」と、自分の考えを示さず、相手に答えを丸投げする。②一つの作業が終わると次にやることがわからず、ぼーっとしている。③「自由にしていよ」と言うと、何をしたいかわからなくなる。④正解のあるものはこなすことができるが、正解のないものはやりたがらない。⑤いつも自分の考えが、誰かの考えと同じか確認する等です。

もし子どもにこれらの傾向があれば、私たち大人は子どもとの関わり方を考えなければなりません。大人の無意識の「察して動く」という習慣が子どもの「自分で考え、判断し、行動する力」を奪っているのです。いわゆる大人の過干渉です。例えば、「お箸がない」と言えば、親がお箸を持ってきてくれます。親は察することができるので、子どもの言葉を最後まで確認することなく動いてしてしまうのです。この状況が習慣になると、子どもは、何もしなくてもまわりが察して動くことがあたり前になってしまいます。子どもは自分で考えて行動する自己決定の機会が与えられないため、何か課題に直面した時に「この状況を自分でどうにかしよう」という発想や意欲が育たなくなってしまうのです。それどころか、恐ろしいことに過干渉で育った子どもは、与えられたサービスをひたすら求め続けるようになり、サービスの質に不満を言うようになりやすくなります。例えば、朝、自分が起きられなかったのに、「なんで起こしてくれなかったのか」や勉強がわからないことに対して「先生の教え方が悪い」、部活では「指導者の指導の仕方が悪い」等です。最近では、社会でも自分で考えて行動できない指示待ちの大人が増えて困っているという話や会社のサービス等に対してクレームが多くなったという話をよく耳にします。

では、どうすれば自分で考え行動できる力を育てることができるのでしょうか。NLP 教育セラピストの桑原朱美先生は、不適切な大人の関わり方が子どもの主体性や自信を奪っていることを理解し、①あえて「物わがりの悪い親に」になり、子どもに自分の言葉で自分の意思を表現させる。②子どもの言葉の情報不足には「それで、あなたはどうしたいの？」と問い直す言葉かけが大切だとしています。「あなたはどうしたいの？」の言葉は、子どもが自分の状態を解決するための方法を考えるきっかけづくりになり、自己決定へと導きます。親が口や手を過剰に出すことなく、どんな小さなことでも常に子どもに自分で考え行動する自己決定の機会を与えていくと、「自己肯定感」が高まり自ずと主体性と自信がついてきます。なぜなら、自分で決めたことを認めていくことは、自分のありのままを受け入れることになるからです。

これからの社会は、急速な情報化や技術革新、グローバル化により、将来の変化を予測することが困難とされています。予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に物事にに関わり、その解決を目指して自分で考え、判断し、行動する力が重要となってきます。そして、日々の子育ての中で、「自ら考えるという習慣をどのように育てていくか」ということが、これからの社会を考えた時、もっと重要な課題となってきます。まずは、私たち大人が、子どもの自律への芽を大きく育てる関わり方をしていきましょう。「さあ、あなたはどうしたいですか？」